

# 意味と形式

児 玉 徳 美

## 1. はじめに

言語は記号として意味と形式の結合したものである。意味と形式のうち一方が欠けたものは記号の役割をはたさない。意味はコミュニケーションにおいて伝達する情報や意図を構成する内的表示であり、形式は音声や文字として耳や目で客観的に捉えることのできる外的表示である。意味と形式は物理的実体であるか否かという点で違うが、特定の語や語群は内的表示としても外的表示としても他の語や語群と異なる固有の特質をもつという点では変わらない。

ことばを使用する日常生活において意味と形式のどちらが先行するかは状況によって異なる。意味不明の語に遭遇したとき辞書をひいて意味を確かめる場合は形式から意味へ進むが、母語から外国語へ翻訳するとき適当な外国語が思い浮かばなく、双解辞書で適当な外国語を探す場合は意味から形式へ進んでいく。韻文は意味と形式が1つに融合したものとよくいわれるが、詩人の頭の中では意味と形式が同時にうごめいているともいえる。幼児が母語を習得する際、すでに身につけている認知や概念に対して語を探すのか、それとも語を習得したあと認知や概念を形成するのかというやっかいな問題もある（詳しくは児玉2002:7-9参照）。この認知優先か言語優先かという対立は、大人の言語と思考の関係にもつながる。真実はいずれか一方が先行するというより同時に進行しているのかもしれない。

言語分析においては意味と形式の結合をどのように説明するかが問題となる。かつて Bolinger (1977) は具体的な表現において形式が違えば意味にも違いがあり、意味が違えば形式にも違いがあり、意味と形式は1対1の対応をなすと主張した。ここでの関心は、ある言語で生き延びている語や構造はどれをとってみても意味・形式上なんらかの役割をはたしており、余分な存在物がなにもとつとしてないということにあった。不要な語や構造は消える運命にあり、個別具体的な語や語群に関しては筆者も同感である。しかしこの立場は語や語群が違えば意味や形式において共通点が存在しないと主張しているわけではない。異なる語や構造には意味や形式に違いと同時に共通点も存在する。特に抽象的な段階では同一性さえみられる。言語分析は意味と形式の結合において語や構造の多様な言語表現にどのような異同があるかを明らかにするものである。

本論は言語習得や言語と思考の関係といった言語の生成過程の観点からではなく、言語がどのような組織をもつかを説明する言語分析の観点から意味と形式の関係を問う。§ 2 で言語分析がこれまで意味と形式をどのように扱ってきたかを振り返り、§ 3 では本来、意味と形式はどのような関係にあるかを考察し、§ 4 では統語論に傾斜しがちな言語分析の限界を示す。現在、意味と形式を統合する確固とした枠組みが存在するわけではない。その前段階として§ 5 では意味論を軸に分析した場合どのような言語構造が浮き彫りされるかを探り、§ 6 では言語分析の今後のあり方を考察する。

## 2 . 20世紀の言語分析

## 2.1. 近代言語学の成立

19世紀までの言語研究が主に諸言語の歴史的変化に関心を向けたのに対して、20世紀の言語研究は特定の時代の言語構造を追究する方向に進んでいった。この変化はコペルニクスの転回とも呼べるものであり、その出発点にSaussure (1916)がいる。

Saussureによると、言語はその単位がバラバラに羅列されたものではなく、単位どうしが有機的な関係をもつ構造(体系)をなし、同時にその構造は自立的な記号体系をなしている。各単位は構造全体の中に位置づけられ、各単位は他の単位との対立・差異によってのみ成立する。近代言語学は各単位が相互依存関係にある組織体である構造を追究しており、広義の構造主義の枠内にある。近代言語学がSaussure (1916)から受け継いだ基本概念の中には2分法の形式で述べられるものが多い。ラング(langue)とパロール(parole)、共時態と通時態、内容=意味(signifié)と表現=形式(signifiant)、結合関係と選択関係、形相(forme)と実質(substance)などである。

Saussureから受け継いだ諸概念は抽象的なレベルのものである。そうした諸概念間の関係や諸概念(の単位)と現実世界を結ぶものとして価値(valeur)という重要な概念がある(Saussure 1916:155-69参照)。価値は記号体系内で相互依存関係にある各単位が定まった規則に応じて同じものであるか否かを決定するものである。例えば日本語の音素の/i/は/a,u,e,o/との相互依存関係において決定され、英語の/i/は/a,e,ɔ,æ,ɛ/などとの相互依存関係において決定される。日本語の音素/i/と英語の音素/i/は異なるが、これは両者が異なる価値をもつためである。意味においてフランス語のmoutonは「羊」と「羊肉」を表すが、英語のsheepは「羊」しか表さない。moutonとsheepは「羊」では同じ意味を表すが、両語が同じ価値をもっているわけではない。

§1では言語が意味と形式(音声)の結合したものであると述べたが、Saussure (1916:157)はそれぞれをsignifié, signifiantと呼び、言語は両者が恣意的に結合したものであるという。意味と形式のそれぞれが、また両者の結合が恣意的であるからこそ、共同体社会のみが慣用や一般的受容に基づき約束事として記号の価値を構築することができ、個人が勝手に価値を決定することはできない。言語学が対象とするものが個人の個別具体的なパロールでなく社会的約束事としてのラングであるとするのもこのためである。Saussureはまた言語記号の意味と形式は紙の表裏の関係に似ているという。表を切り取ろうとすれば裏も切れてしまい、表裏一体の関係にあるという。しかし言語を分析する抽象的な段階では両者を区別することも可能である。もし例えば語において両者が常に渾然一体に結合し区別できないならば、語が変幻自在に現れたり消えていき、言語の総体は存在しても、記号として固有の言語体系そのものが成立しなくなる。

抽象的なレベルで意味と形式を区別することではじめて言語構造内における各単位の相互依存関係を明らかにすることができる。相互依存関係としては大きく2種類のものがある。1つは線条的な流れの中でつながっていく結合関係であり、あと1つは諸単位が潜在的に交替可能な選択関係である。例えば/mita/は結合関係として/m/ /i/などの関係であり、この/m/は/kita/(来た)の/k/や/nita/(似た)の/n/と交換可能な選択関係を示す。同じような相互依存関係は意味にもみられる。

- (1)a. { 太郎 } が {きのう} { 笑った。 }  
       { \*椅子 } が { 学校で } { 叱られた。 }

b. { \*太郎 } が { きのう } { こわれた。 }  
       { 椅子 } が { 学校で } { 燃えた。 }

(1a,b) で左から右への語連鎖は結合関係を、{ } 内は選択関係を示し、その(不)適格性は意味上決定される。

現実世界は明確に区別できない連続体をなしているが、言語は有限の語で現実世界を区切らざるをえない。現実には平たい「皿」(plate)と深みのある「どんぶり」(bowl)の間のものであっても不思議でないが、日本語や英語にはそのための名詞がない。その間のもので人によっては「皿」と呼んだり「どんぶり」と呼んだりする。またその入れ物に1個の卵が載っている場合、同じ実体に次の表現が可能である。

(2)a. 皿の上の卵 (an egg on a plate)

b. どんぶりの中の卵 (an egg in a bowl)

人により表現が異なるのも、相互依存関係をなす意味の価値が不安定なためである。

§ 1 では形式(音声)と意味が物理的実体であるか否かで異なると述べた。確かに音声は耳で確かめることができるが、意味は形のないあいまいさをもつ。しかし音声も先ほど例示した「皿」と「どんぶり」の意味と同様に固定的でも不動のものでもない。音声も前もって存在し、言語使用の際、その音声にラベルを張りさえすればすむものではない。先に日本語と英語で/i/の音素の価値、つまり音価が異なると述べたが、そのことは音声も意味と同じように抽象化された心的実体であるということを示している。

抽象化された言語分析が対象とするのは実質(substance)でなく形相(forme)である。ここでのformeは意味ではなく実質に対立するもので、§ 1 で述べた音声と意味の両方に存在するものである。formeは(音声)形式のように五感で捉えられるものに用いられるが、このformeは価値と関連し、substanceの対立語として目に見えない「しくみ、働き」であり、安藤・澤田(2001:14)に従い、「形相」と訳すことにする。Saussure(1916)は形相と実質の関係について詳しく展開していないが、言語学がラングを対象にするというのも、意味と音声の形相(実質でない)を対象にするというふうに言い換えることもできる。

Saussure(1916)は言語を歴史的な因果関係から開放し、人間の誰もが身につけているありのままの言語がどのようなしくみをなしているかを研究対象とすることの重要性を提起した。その言語理論は価値という抽象的な概念を1つのkey wordとするものであった。この理論はその後記号学を生み、さらには思想界において言語への関心を高め、20世紀の「言語論的転回」の重要な契機となった(言語論的転回については新田ほか1993参照)。

## 2.2. 統語論中心の分析

ヨーロッパではSaussure(1916)後、Saussureに直接教えを受けたC.Ballyなどがジュネーブ学派を結成し、L.Mathesius、R.Jakobsonなどがプラーク学派を、L.Hjelmslevなどがコペンハーゲン学派を創設した。それぞれがSaussureの言語理論を継承し、その解釈を深め、独自の研究分野も開拓していった。その成果には言語機能や音韻論の開発、形相と実質の区別などがある。

Saussure(1916)のアメリカでの受容はヨーロッパのそれと違っている。そのことはアメリカで生まれた構造主義言語学や生成文法の創始者と呼ばれるBloomfield(1933)やChomsky(1957, 1965)の参考文献にSaussure(1916)が載っていないことからもうかがえる。記載こそないが、

Saussureを全く無視したものともいえない。2人とも各单位が他の単位との対立・差異によって成立する構造を明らかにしようとする点では Saussure (1916) の構造主義の流れの中にある。もちろん細部においては異なる。例えばアメリカの構造主義言語学は観察された客観的な言語観を基礎に emic 的な各单位の分類・配列を主な仕事とした。ここではラングではなくむしろパロールが言語構造を探る出発点になっている。Chomsky (1965) は言語知識 (competence) を言語学の対象にするとした。というのも言語知識は「社会的約束事」というより「生得的能力」に密接に結びついており、そのことはラングという用語では表せないと考えた。

言語学の下位分野として意味を扱う意味論、音声を扱う音韻論、(形態論を含む) 統語論がある。このうち統語論と意味論が文法を構成する。ここでは主として Saussure 後の文法の展開を振り返ってみる。Bloomfield (1933) 後のアメリカ構造主義言語学は行動主義の影響を受け、科学の厳密な方法としては物理的に観察できる事柄のみが信頼できると考えた。例えば語の意味とはその語を刺激として聞いて聞き手に引き起こされる反応であるというものであり、Pavlov の条件反射のような理論が意味の原理として使われた。その結果、音韻論では多くの成果があったが、意味論ではほとんど進展が見られず、統語論では句構造を基礎にした IC 分析が開発されたにすぎなかった。文法の新たな展開は行動主義や Bloomfield 後のアメリカ構造主義言語学を批判した Chomsky (1957) 後の生成文法を待たねばならなかった。

新たな展開は辞書で扱う語彙情報を文法に導入したと無関係ではない。Saussure (1916:186) は早くから語彙情報を文法に組み入れるべきと主張していたが、文法自体がそれを組み入れる枠組みになっていなかった。Jespersen (1924:32) や Bloomfield (1933:274) は辞書と文法の関係に言及し、辞書は特殊で不規則なものを扱い、文法は一般的で規則的なものを扱うと区別していた(詳しくは児玉 2002:89-90 参照)。Chomsky (1957) が初めて辞書を文法に組み入れたが、生成文法の初期の枠組みでは、句構造規則の後半に書き換え規則の形で語彙項目が導入されたにすぎなかった。語彙項目の詳しい統語的・意味的情報が語彙部門 (lexicon) として文法と密接に結合するようになったのは Chomsky (1965) 以後である。すべての語が同じ普遍的な意味素性や共起関係を示す選択制限で表され、語彙情報はもはや特殊でも不規則的なものでもなくなった。個々の語彙項目は固有の語彙情報の束を選び、その選び方によって語彙項目の特徴が違って来るにすぎない。同じことが個々の文にもいえる。語彙情報を含む意味的・統語的情報の束によってその特徴が違って来る。

問題は意味情報と統語情報の関係にある。いずれを分析の出発点とするかで概略次の2つの方法に分かれる。

(3)a. 統語構造 意味表示

b. 意味表示 統語構造

図式的に言えば、1970年前後の解釈意味論や1990年前後以降のミニマリスト・プログラムなど Chomsky の理論の枠組みが (3a) の立場をとるのに対して、1970年前後の生成意味論およびその流れをくむ認知意味論、あるいは Halliday の選択体系機能言語学は (3b) の立場をとる。意味論と統語論の関係では分析の出発点として (3a,b) のいずれをとるかというよりむしろ意味情報と統語情報が結合する際の相互の支配関係のほうが重要である。通例 (3a) は統語論が自立的なものであり、意味論は解釈的なもので統語論のアウトプットから意味分析が始まるとする。これに対して (3b) は分析の出発点こそ意味表示が先行するが、意味情報が常に統語構造に先行すると考えているわけではない。ある程度の自立性を意味情報にも認め、意味論と統語論が入り乱れて相互に影響

を与えながら言語構造を生成する。

(3b) のようにある程度意味論に自立性を認める分析があるとはいえ、20世紀の文法で提案されている規則や原則はほとんどが統語論中心に規定されている。次例を参照されたい。

(4) 受身化規則

他動詞の目的語を主語の位置に繰り上げる：

John broke the window.      The window was broken.

(5) 動詞句削除規則

一定の条件（例えば等位構造や復元可能性など）の下で助動詞に後続する動詞句の構成素を削除することができる：

Peter can hit a home run, and Betsy can Ø, too. (Ø= hit a home run)

(6) 等位構造制約

等位項の一部を取り出して移動すると非文になる：

\*Who did you meet [John and \_\_\_]?

（君はジョンと誰に会ったのか）

(4)-(6) は英語の文法規則である。もちろん実際の言語活動はさらに詳しい規則で補完されている。次は諸言語の構造類型に言及したものである。

(7)a. 関係節化における文法関係階層 (Keenan-Comrie 1977)

主語 > 直接目的語 > 間接目的語 > 斜格 > 属格 > 比較目的語

b. 主語選択階層 (Fillmore 1971)

動作主 > 経験者 > 道具 > 対象 > 起点 > 着点 > 場所 > 時間

(8)a. 対格言語 vs 能格言語

b. 動詞フレーム言語 vs 衛星フレーム言語

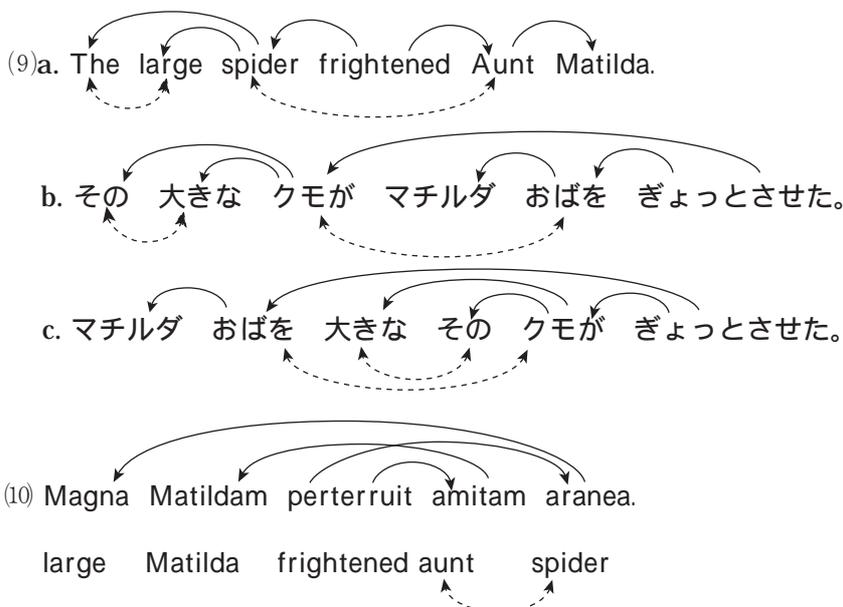
(7) は言語の普遍的特徴を示したものである。Keenan-Comrie は約 50 の言語を調べた結果、(7a) の順に関係節化されやすいという。言語によっては主語だけが、あるいは主語と直接目的語が関係節化を許すがこれらの要素をとばして間接目的語などが優先的に関係節化することは許されない。日本語は通例斜格の一部までが許される（児玉 1991:25 参照）。(7b) はそこで示された意味役割の順に主語になりやすいという。主語になりやすいものとそうでないものが言語によって異なる。例えば英語は *The key opened the door.* と主語に道具も可能であるが、日本語では「鍵がドアを開けた」は非文であり、主語は英語より左寄りの意味役割を選ぶことになる。(8) は言語類型を示す。(8a) の対格言語は他動詞文の主語と自動詞文の主語が同じ格形態で他動詞文の目的語が異なる格形態（対格）をもち、ラテン語・英語・日本語などが属する。これに対して能格言語では他動詞文の目的語と自動詞文の主語が無標の格形態で他動詞文の主語が特別の格形態（能格）をもち、オーストラリア原住民諸語やインドイラン諸語が属する。Talmy (1985) によると、(8b) が示すように、出来事を記述する際、動詞が中心となる言語と項をなす名詞以外の前置詞や副詞などが中心となる言語がある。前者の動詞フレーム言語にはロマンス語系・タミール語・日本語などが属し、後者にはロマンス語系を除くインドヨーロッパ語族・フィンランド語・中国語などが属する。

(4)-(8) で注目すべきことは統語論中心に規定されている点である。ときに意味情報が用いられるが、それは統語的な構造を説明するためであり、あくまで統語情報を軸に規定されている。問題はそうした規定により言語構造がうまく記述されるのかということになる。

## 3. 意味と形式の関係

## 3.1. 1対1の対応

言語が意味と形式の結合したものであるとすれば、意味と形式は相互に影響し動機づけし合いながら言語構造を生成していることになる。その際、意味と形式が1対1の対応関係を示すことがある。例えば統語上の依存関係と意味上の依存関係である。



(9)(10)の上側の主要語から修飾語への依存線は統語的・意味的依存関係を示し、下側の点線の依存線は同じ主要語に依存する修飾語どうしの統語的意味的相互依存関係を示している（依存関係の規定については児玉2002:189参照）。(9a, b)の英語と日本語は語順こそ違おうが、同じ主要語に依存する一連の修飾語はそれぞれ連続した語群をなしている（英語のfrightened Aunt Matilda, 日本語の「その大きなクモが」など）。(9a)の英語は動詞に依存する名詞句の語順および名詞を主要語とする修飾語どうしの語順が固定しているが、日本語は(9b, c)のように語順の変更が可能である。ただし語順を変えても統語的意味的依存関係は変わらない。(10)のラテン語はAitchison(1978:71)による。ラテン語も(9a)に対応する語順のほうが普通であるが、(10)では主要語とそれに依存する修飾語がすべて遠く離れている。これが可能であるのも屈折言語で形態上依存関係を明示しているためである。たとえ(10)の語順をとっても意味・形式上依存関係は保たれている。

他動詞のbreak, killなどは統語上2つの項（主語と目的語）、自動詞のfall, dieなどは統語上1つの項（主語）をとるが、その項はそれぞれ意味上の項（動作主・対象など）と対応している。

(11)a. John broke the window.

（主語：動作主） （目的語：対象）

b. John fell down.

（主語：対象）

統語上の項は必ず意味上の項と結合する。ただし統語・意味上の項が1対1で対応するか否かは言語理論によって異なる。(11a)はともかく(11b)はJohnがめまいで倒れたときにもわざと倒れたときにもいえる。Anderson(1977)のように1つの統語項に複数の意味役割を自由に付与する場

合、わざと倒れた場合 John には動作主も付与される。生成文法は Chomsky (1981) に代表される 1 項 1 意味役割の 規準を長い間守っていたが、Jackendoff (1987,1990) は異議を唱え、Anderson のように 1 つの統語項に複数の意味役割を認めている。

signifié と signifiant が恣意的に結合しているという限りにおいて意味と形式は 1 対 1 で対応している。しかし言語分析で重要なことは、個別の語句や文が文脈の中でどのように用いられるか、構造上、意味と形式は下位区分され、それぞれがどのように対応しているかということになり、その対応関係はそれほど簡単ではない。

### 3.2. 多対 1 の関係

連続体をなす現実世界 (用例(2)参照) や多様な思いを有限の言語記号で表現するとすれば、「意味対形式」はしばしば「多対 1」の関係になる。例えば God (神) という形式のもつ意味内容は 10 人 10 色で人により異なる。同じ語や文が多様に解釈されるとすれば、意味が形式に動機づけや影響を与えることも、逆に形式が意味に動機づけや影響を与えることもある。本節は英語を対象にその実態を考察する。

(12) John likes flying kites.

(12) は文脈により多様に解釈される。flying kites は「飛んでいるタコ」か「タコを飛ばすこと」か、このタコはどんな種類のものか、likes の現在時制は一般的なことを記述しているのか、それとも特定の時間・場所が限定されているのか、John は誰か、などに多様な解釈をもつ。多様な解釈を嫌い、例えば「タコを飛ばすこと」の解釈を明示したいときは flying kites を to fly kites とすることにより形式が意味を限定することもできる。限定された意味では flying と to fly の 2 つの形式が存在し、意味と形式が 1 対多の対応を示すともいえる。

語・句・文が多様な解釈を有するとはいえ、語・句・文はそれぞれ固有の解釈範囲を有しており、文脈によりどんな解釈でも許されるわけではない。固有の条件の下で文脈 (場面・現実世界の経験や知識・諸命題をつなぐ推論など) により形式が伝える意味が決定される。意味分析のむずかしさは語・句・文の解釈が多様な要因に支えられ、その要因が必ずしも常に同じ働きをしないことにある。

二重目的語構文およびそれと関連する構文で意味と形式がどのように結合しているかをみてみよう。

(13)a. John gave Mary a vase.     John gave a vase to Mary.

b. John sent Mary a vase.     John sent a vase to Mary.

c.\*John put the table a vase.     John put a vase on the table.

d.John gave Mary [the door] a hard kick. (     John kicked Mary [the door] hard. )

\*John gave a hard kick to Mary [the door].

(14)a. I've found Mrs. Jones a place.     I've found a place for Mrs. Jones.

b. ?I've found the magnolia tree a place.     I've found a place for magnolia tree.

c.\*John opened Mary the window.     John opened the door for Mary.

d.John opened Mary a beer.     John opened a beer for Mary.

(15)a. I was given a house. < He gave me a house.     He gave a house to me.

b.\*I was built a house. < He built me a house.     He built a house for me.

c. I was built the huge palace. < He built me the huge palace. He built the huge house for me.

cf. d. This house was lived in by George Washington /\*John. < George Washington / John lived in this house.

英語の二重目的語構文は通例間接目的語 (IO) が直接目的語 (DO) を所有する含意をもつ。さらに (13a, b) の give, send などは主語の動作主がすでに存在している物 (DO) を IO に移動することを含意する。(13a) の give は to 与格構文でも二重主語構文と同じく主語が DO を移動させ DO が Mary の手に渡っているが, (13b) の send の場合, 二重目的語構文はともかく to 与格構文では DO が Mary の手に渡っているか否かは不明である。(13c) の二重目的語構文が不適格であるのは主語が DO を移動させているが IO の the table が無生物で DO の受け手になりえないためである。ただし give が行為名詞を伴う (13d) のような軽動詞構文では IO が生物か無生物かに関係なく IO が確実に DO の行為を受けている。本来は ( ) ですむところであり, 移動を含意する to は余分なもので to 与格構文は認められない。(14b) の二重目的語構文が不適格であるのは the magnolia tree が無生物で DO の受け手になれないためである (Quirk et al 1985:741 参照)。同じく (14c) の Mary は人であっても意味上 DO の受け手でないため不適格である。しかし同じ open を用いた (14d) では Mary が DO の受け手になっており適格である。(15) は to 与格構文をとる give と for 与格構文をとる build の違いを表している。give などの二重目的語構文は一般に既存する DO が移動して IO の所有となるのに対して, build などの製造動詞は二重目的語構文の DO が既存するものではない (したがって移動もない)。DO は動詞の作用の結果, 生まれ, そのあと IO の所有となる。この (非) 既存性の違いから (15b) の受身文は一般に容認されないが, (15c) のように DO の存在が IO に大きな利益をもたらす場合, まるで利益が IO に移動するかのように IO は受身文の主語になりうる (詳しくは Kitamura 2003 参照)。これは述部の利害関係が強調されると, その影響が受身文の主語に及ぶ現象の一環である。(15d) は二重目的語構文に直接関与しないが, 本来受身文の主語になりにくい場所を表す名詞句が述部の強い利害関係の影響を受けているか否か, 換言すれば主語として焦点を受けるに足るか否かにより (不) 適格性が異なる (詳しくは児玉 1991:49-51 参照)。

ちなみに日本語では (13)-(15) の二重目的語構文およびその変異形が少し異なるふるまいをする。日本語の「IO に DO を ~ する」という表現は, いかにも状況中心言語らしく事物の移動や状態の変化に敏感で, 行為の結果や所有関係をあまり重視しない。そのため (13c) の put も give, send と同じ扱いとなり, to 与格構文と二重目的語構文の違いもない。ただし非既存的で移動がなく新たに所有関係や利益を含意する (14c,d) や (15b,c) あるいは make, cook, knit, cut など for 受益構文をとる動詞をもつ文ではしばしば「IO に DO を ~ してやる / くれる / もらう」という表現形式をとる。この場合 IO は動詞の作用の結果生まれた非既存の DO を所有することになるが, 実際に受け取るか否かは明示しない。したがって英語のように for 受益構文と二重目的構文の区別はない。(14a,b) の find は Kitamura (2003) が指摘するように give 型と build 型の中間にあり, 2者のうちいずれの型をとるかは人により異なる。

次例では法助動詞と等位構造がもつ固有の統語的特質と現実世界の経験や知識に基づく意味解釈がせめぎ合っている。

(16)a. The doctor must examine John. John must be examined by the doctor.

b. John must clean the room. The room must be cleaned by John.

- c. The cat must stay out of the living room.
- (17)a. John may kiss Mary. Mary may be kissed by John.  
 b. Visitors may pick flowers. Flowers may be picked by visitors.  
 c. The cat may stay in the living room.
- (18)a. \* What book did John [buy \_\_\_ and read the magazine]?  
 b. \* Tomorrow, I might go to the movies [today or \_\_\_].  
 c. \*Here's the whisky which [I went to the store and Mike bought \_\_\_].
- (19)a. What book did John [buy \_\_\_ and \_\_\_]?  
 b. Here's the whisky which I [went to the store and bought \_\_\_].  
 c. How much can you [drink \_\_\_ and still stay sober]?

(16)(17)の根元的法助動詞の must や may は主語に対する義務や許可を表すため、それぞれ (a) において能動文と受身文で意味が異なる。しかし (b) のように受身文の主語が無生物の場合、room に義務を負わせたり、flowers に許可を与えることができないため、能動文と受身文はほぼ同義となる。さらに (16c) では義務の受け手は主語の cat というよりむしろネコの飼い主になるが、それに対応する (17c) で許可を受けるのはネコであり、その飼い主はあまり焦点にならない。これは現実世界の経験や知識に由来するものでもある。(18)のような等位構造においては 'X and [or] Y' の一部の要素を取り出して移動してはならない。(18a-c) はその制約に違反して非文である。しかし同じ制約に違反しながら (19a-c) は適格である。(19a) は違反とはいえ 2 つの等位項から共通要素が取り出されているため容認されると統語的に説明することもできる。しかし (19b) は 2 番目、(19c) は最初の等位項のみから取り出されているにもかかわらず容認される。この容認性の可否は統語的に説明できない。2 つの等位項の間に因果関係に基づく一貫性が働いているという意味解釈を与えてはじめて説明が可能である (詳しくは Kehler2002:6 参照)。

次は容認性の判断が人により異なる不安定構文の例である。

- (20)a. John hammered the metal flat / ??to a pulp.  
 (ハンマーで金属を打って平らにした)
- b. John laughed himself to sleep / \*sleepy.  
 (笑いすぎていつの間にか眠った)
- (21)a. John ran home for an hour / (??) for one day.  
 (家には走って帰り、1時間[1日]いた)
- b. (??) John put the cup on the table for two days.  
 (テーブルにコップを2時間置いていた)
- (22)a. (?) This problem was looked into by John, and Bob did too. [look into the problem]  
 (この問題はジョンによって調査され、ボブも調査した)
- b. This problem was to have been looked into, but obviously nobody did. [look into the problem]  
 (この問題は調査されることになっていたが、明らかに誰も調査しなかった)

(20)は結果構文であるが、下線部の語類により容認性が異なり統語形式が関与している。(21)の動詞は本来状態を示すものではないが、その動詞にアスペクト上行為と状態の2種を認めるか否かにより容認性が異なる。(22)は動詞句を削除する際復元可能な[ ]内の語句が先行節になければならないとい

う統語的制約に違反しているが、意味上類似性や対照を強調する場合、形式上の制約はあまり重視されない（用例(22)についてはKehler2002:56参照）。(20)-(22)では人によって容認性が異なるが、その違いは意味と形式のいずれを重視するか、あるいは意味のどの要素を重視するかの違いによる。

ことばを用いて情報を伝達する際、無意識のうちにGrice (1975) の量の公理(1)(2)を守っている。量の公理(1)は「必要なだけの情報を与えよ」であり、情報の公理(2)は「余分な情報を与えるな」である。2つの公理は一見、矛盾しているようにみえるが、複数の命題をつなぐ推論とも関係し、情報伝達に必要な意味上の要件を示唆している。次例の容認性は言語表現の形式から直接引き出されるというより、むしろ情報伝達における意味上の要件を満たしているか否かによる。

(23)a. John enjoyed the book.

(ジョンは本を読んで [食べて] 楽しんだ)

b. John began the book.

(ジョンは本を読み [食べ] 始めた)

c. ??John enjoyed [began] the rock.

(24)a. \*This house was built. vs This house was built last year.

b. \*The book was read. vs The book was read by many.

c. \*The car drives. vs The car drives easily.

d. \*Pat laughed a laugh. vs Pat laughed a heartly laugh.

(25)a. John took a train from Paris to Istanbul. He has family there.

(ジョンはパリからイスタンブール行きの列車に乗った。そこに家族がいる)

b. ?John took a train from Paris to Istanbul. He likes spinach.

(?ジョンはパリからイスタンブール行きの列車に乗った。ホウレンソウが好きだ)

(26) \*Excuse me, I'm John Smith. Where is the post office?

(23a,b) の動詞enjoy, beginは出来事から楽しみを得たり出来事を始めることを意味する。bookにかかわる出来事としてはJohnが人であれば「読む」ことであり、もしヤギであれば「食べる」こととなる。出来事を示す述語が欠落しているが、主語との関連で最も結合しやすい動詞が補われる。しかし(23c)はenjoy [begin]とrockに関連する出来事がすぐに思い浮かばないため不自然になる。(24a-c)においては主語が発せられた時点で主語の存在が前提になっており、家は建てられ、本は読まれ、車は運転されるのが当然のこととみなされ、動詞は前提を確認し断定したものにすぎない。下線部の語句は統語上随意的要素であるが、付加されことではじめて必要な情報量をみたしている。(24d)の下線部も同様である(詳しくはGoldberg-Ackerman2001, 児玉2002:151-2参照)。(25)はKehler(2002:2)による。(25a)ではJohnが家族に会うためにIstanbulに向かっていると想定されるが、(25b)は量の公理(1)に違反し情報不足で2つの出来事が結びつかないため不自然となる。逆に(26)は量の公理(2)に違反している。郵便局の場所を聞くのに下線部の自己紹介は情報として余分なため不自然である。

#### 4. 統語的説明の限界

言語の意味と形式が§3.1でみたように、常に1対1で対応するのであれば、それほど問題はな

い。形式または意味の一方を記述し、それに他方を写像しさえすればすむ。しかし実際のところ、意味と形式の対応関係は§ 3.2でみたように、一筋縄でない。20世紀は§ 2.2でみたように明示的な形式を軸に統語論中心の分析を進めてきたが、統語構造が自立的で意味論が解釈的なものとする(3a)の方式には特に問題が多い。第1に分析法の問題として言語が意味と形式の結合したものであるとするならば、意味にそれ相応の役割を与えるべきである。第2に、分析法の問題点がそのまま分析対象にまで影響を与えている。20世紀に統語論中心に分析を進めた結果、分析対象そのものが狭いものになり、文を最大の単位としている。

まず第1の分析法の問題点からみてみよう。言語が人間が伝えたい「思い」を表すものであるとすれば、形式は究極的には意味に動機づけられている。例えば用例<sup>(13)</sup>-<sup>(15)</sup>で扱った二重目的語構文、それに対応するto与格構文、for受益構文、受身構文を思い出してみよう。もし(3a)の方式で意味を解釈的なものとみた場合、二重目的語構文およびその3つの変異形の違いは例外を含めて意味に基づいて説明され、その記述は極めて複雑になる。4種の構文が存在する意味上の理由、DOの移動、DOの(非)既存性、DOに対するIOの所有関係、DOからIOへの影響関係などの意味情報が交錯しながら利用される。その結果、意味情報相互の関連、その意味情報が英語の構造全体の中でどのような位置を占めるかについての考察、さらには英語と異なる統語形式を派生した日本語の意味情報にみられる他言語との比較などについての考察は中心的な課題とはならない。

意味と形式の結合でのむずかしさは、形式が必ずしも常に意味に動機づけられない点にある。ときに意味より形式が優先したり、意味と形式の動機づけが双方向的に働くことがあるためである。例えばbuildはfor受益構文をとり通例受身文に用いられないが、<sup>(15c)</sup>では二重目的語構文のプロトタイプともいえるto与格構文をとるgiveなどの影響をうけて受身文が可能になる。また<sup>(9)</sup><sup>(10)</sup>が統語的にも意味的にも同じ依存関係をもったり、ラテン語の語順が<sup>(10)</sup>より<sup>(9)</sup>に対応する語順のほうが普通であるのも、意味と形式の関係が双方向的動機づけによるためといえる。

言語の歴史的な変化においても意味が必ずしも常に形式を変えるわけではない。形式が意味を変えたり、意味と形式が双方向的動機づけによって変化したりする。例えば英語の大母音推移は後期中英語から初期近代英語に至る数世紀にわたっているが、この時期に英語構造の機能変化の影響を受けて意味も大きく変化している。

次に第2の分析対象の問題に移る。§ 2.2はChomsky(1965)で詳しい語彙情報が文法に組み込まれて以後、言語分析が大きく進展したと述べた。しかし皮肉なことに、そこでの記述は語彙項目の統語的・意味的情報が基礎にあり、さらに統語論中心の分析であったため、主部・述部からなる文を最大の単位とし、文を超える談話にまで至らなかった。日常の言語活動は1つの文で終ることはなく、通例複数の文を重ねてコミュニケーションを行う。ところが言語が形式を中心に分析される限り、発話を構成する複数の文はしばしば文構造の繰り返しであり、文を最大の単位とすることにそれほどの不都合はなかった。

McCawley(1988)はDiscourse Syntaxの1章を設けて文を超える談話を対象に統語上の単位を見出そうとしたが、せいぜいパラグラフしか出てこなかった。しかしパラグラフすら人により区切り方が一定でなくパラグラフ固有の特質に乏しく、文を超える統語単位として認定することができなかった。つまり、文と違って談話には固有の特質がないことを示した。文と文の結合は一見予測できないほど自由にみえるが、談話には統語上特有の構造が存在しないということである。しかし統語的な構造が存在しないことが、意味的にも固有な構造が存在しないということには必ずしも直

結しない。言語が意味を中心に分析される場合、文の意味は分析対象である話し手の意図や主張の一部を構成するにすぎない。話し手の意図や主張に接近するためには文を超える談話を対象にせざるをえない。

分析対象の限界は(3a)だけでなく、意味情報にそれ相応の機能をもたせようとする(3b)の分析にもみられる。認知意味論や関連性理論、あるいは新Grice派を含む語用論は言外の意味も考慮し、ときに文を超えるものを対象にしている。しかしそれは2文からなる2人の対話にすぎない。扱っている対象のほとんどが文である。言語理論が21世紀に飛躍するためには文を最大の単位とする呪縛から抜け出し、意味を基礎に文を超える領域に入る必要がある。そうしてはじめて談話に予測可能な意味上の構造が存在するか否かが明らかになる。

## 5. 意味を軸にした分析

形式とともに意味を言語分析の柱に立てる必要がある。意味には用例<sup>(12)</sup>でみた通り多様な要素があり、どのような柱を立てるべきかが必ずしも明確でない。諸言語の多様性が意味と形式の多様性に由来することは確かであるが、ここでは言語構造の多様性を意味特性軸(axis of semantic properties)によって説明することを提案する。意味特性軸とは同一言語内または諸言語間において統語形態上のふるまいの動機づけとなっている意味上の特質を指す。統語現象または言語によっては意味特性軸に敏感(+ )なものや鈍感(- )なもの、あるいはその中間のものがある。両極の間は連続体をなしているためである。意味特性軸は児玉(1991:168-72, 1998:109-14)で特性軸と呼ばれていたもので、この中には意味素性・意味役割・そのほか所有関係、(非)既存性などの意味制約が含まれる。生成文法では諸言語の多様性を説明するものとしてパラメーター(媒介変数)が仮定されている。例えば主要部前置[後置]は語順の決定に關与する統語的パラメーターであるが、それに似たこの意味特性軸を意味上のパラメーターとみなすことも考えられるが、生成文法のパラメーターと対応しないため、ここでは、意味特性軸と呼ぶことにする。

意味特性軸を構成する意味制約は普遍的であるが、形式との結合に反映しやすいものとしにくいものがある。この結合分布の違いは同一言語においても諸言語間においても意味特性軸によって異なる。このように形式との結合分布を検討することにより各意味制約や諸言語間の異同、さらには言語の普遍性に接近することができる。

まず同一言語内での意味特性軸の分布からみてみよう。日本語は対象依存性という意味特性軸に敏感で次のような表現や構造を生んでいる。

### (27)a. 敬語や豊富な自称詞・対称詞

- b. <話し手のなわ張り>が狭い 「そうだ」「ね」などの間接形の発達
- c. <支配的・対称的>の区別に敏感 「を・に・と」の助詞などの発達
- d. 指示詞「こ・そ・あ」の3分法(英語のthis thatなどの2分法と比較)

日本語は相手または対象に敏感に反応し、(27)のような表現や構造を発達させている(詳しくは児玉1998:133-8参照)。そのほかに対象依存性に強いことは「ウチとソト」の意味制約とも結びつきやすい。その結果、「...してやる/くれる/もらう」の表現が生まれている。また日本語は「ウチ」では「お父さん」、「ソト」では「父」と相対的敬語であり、「ウチとソト」で関係なく絶対的敬語を

もつ朝鮮語などと対照的である。

中国語は起点・着点の意味特性軸に敏感である。

(28)a. 老張 給了 老李 一本 書。

give ASP one CL book

John gave Mary a book.

b. 老張 買了 小吳 一枝 筆。

buy ASP one CL pen

John bought a pen from Mary.

c. \*老李 織了 我 一双 手套。

knit ASP me one CL gloves

John knitted me a pair of gloves.

d. 老李 吃了 我 一个 菜果。

eat ASP me one CL apple

\*John ate me an apple.

e. 張三 借 李四 一本 書。

lend/borrow one CL book

John lent Mary a book./ John borrowed a book from Mary.

中国語は主語と下線部の両方が起点と着点を分担できる場合にのみ適格である。その結果(28c)は「織」が製造動詞で主語に起点を付与できないため不適格であるが,(28d)は下線部の「我」が起点,「李四」が着点となり適格である(詳しくは児玉2002:97-9参照)。比較的に着点に敏感であるが,起点に鈍感な英語や日本語と対応するのは(28a)のみで(28b-e)は異なる。(28c)を除いて(28)の主語はすべて起点または着点であり,同時に動作主の意味役割も付与される。中国語のふるまいは1項に複数の意味役割を付与してはじめて説明が可能である。(11b)では生成文法の規準で1項1意味役割か否かで意見が分かれていると述べたが,(28)からその正否は明らかである。

英語について意味特性軸の(無)生物をみてみよう。

(29)a. A dollar doesn't buy much these days. We don't buy much for a dollar these days.

(このごろ1ドルではあまり買えない)

The fifth day saw them at the summit. They reached the summit on the fifth day.

(5日目に彼らは頂上に着いた)

b. John opened the door. vs The door opened.

(ジョンがドアをあけた) (ドアがあいた)

c. John sent Mary /\*London a parcel. vs John sent a parcel to Mary /London.

d. the dog's tail / \*the bed's foot

英語は(29a)のように人主語のほかにも無生物主語がどの言語よりも広く用いられ,(29b)では使役者(causer)が関与する他動詞文も自然現象の自動詞文も同じ動詞形であり,主語が生物であっても無生物であっても区別せず,一見,(無)生物に鈍感のように見える。しかし(29c)の二重目的語構文や(29d)の名詞句では下線部が生物か無生物かによって(不)適格性が違っている。ちなみに英語に対応する日本語では(29a)の場合,人主語のみが可能で無生物主語は不可能であり,(29b)では他動詞文と自動詞文で動詞形が異なる。逆に(29c,d)の名詞句間の関係では\*印の語句が可

能となる。これは(29a,b)の場合、意味特性軸の対象依存性に鈍感な英語が主語として行為者・状況語・使役者・対象のいずれであるかを問わないのに対して、対象依存性に敏感な日本語は項をなす名詞が生物か無生物か、行為者(使役者)か対象であるかにより主語や動詞形が異なるためである。他方(29c,d)の場合、英語は意味特性軸の所有関係に敏感で所有者として生物か無生物かを区別するのにに対して、日本語は鈍感で生物か無生物かを区別しないためである。

次に、意味特性軸の(非)既存性・行為の結果が諸言語間で、例えば英語・日本語・中国語でどのようにふるまうかを比較してみよう。まず(非)既存性からみていく。

(30)a. John gave a book to Mary. vs John built a house for Mary.

b. Mary was given a house. vs \*Mary was built a house.

(31)a. The book I bought. vs \*A book I bought.

b. その本は私が買った。 vs ? 1冊の本は私が買った。

c. 書 我 買了。 vs \*把一本書 我 買了。

(32)a. A different present John gave the other girl.

? 違うプレゼントは太郎はその別の子にやった。

b. \*The other girl John gave a different present.

その別の子には太郎は違うプレゼントをやった。

(33)a. If it rains tomorrow, I'll stay at home.

もし明日雨が降れば、私は家にいる。

要是明天下雨，我就在家。

b. I'll stay at home if it rains tomorrow.

\*私は家にいる、もし明日雨が降れば。

\*我就在家，要是明天下雨。

(34)a. 庭 に / ( \* ? ) で 木を植える vs 庭 \* に / で 木を枯らす

b. 京都 に / ( \* ? ) で 雨が降る vs 京都 \* に / で 雨がやむ

(35)a. 賊 跑了。 vs 跑了 賊。

( The thief has run away. ) ( A thief has run away. )

b. 他兩天之内回来。 vs 他在中国住了三年。

( He will come in a few days. ) ( He lived in China for three years. )

( 彼は2・3日で来るだろう ) ( 彼は中国に住んで3年になる )

c. 他在桌子上跳。 vs 他跳在桌子上。

( He jumped up and down on the table. ) ( He jumped onto the table. )

( 彼はテーブルの上でとびはねた ) ( 彼はテーブルの上にとびのった )

英語は(非)既存性に敏感で行為の前に既に存在するか否かによって(30a, b)のようにto与格構文とfor受益構文が区別され、受身文の適否が違って来る。日本語も(13-15)でみたように、to与格構文とfor受益構文の表現形式や受身文の適否が異なる。(非)既存性はその心的イメージが既に存在するか否かという点で新・旧情報とも関連する。(31a-c)の他動詞文では英語・日本語・中国語とも題目化されている下線部は旧情報であり、新情報は不適格である。しかしこれは常にそうなるわけでもない。(32a)の英語は新情報でも容認されるが、日本語は(31b)と同様に不適格である。逆に(32b)の英語は下線部のIOが旧情報であるが、その題目化は統語上容認されない。ただし日本語は

可能である。つまり二重目的語構文の題目化において英語が新・旧情報より IO, DO の文法関係を重視するのに対して, 日本語はその逆ということになる。(33)の英語では (a) が (b) より普通である。これは思考過程で条件節が帰結節に先行するためである。しかし帰結節の内容が旧情報であり条件節が新情報で後続の文と関連する場合, (33b) も可能である。しかし日本語や中国語では副詞節が常に主節に前置するため (33b) は不適格になる。つまり, ここでの日本語や中国語では形式が意味に優先するのに対して, 英語はその逆である。日本語は (非) 既存性の分布が二重目的語構文の変異形では英語とほぼ同じであるが, 題目化においては英語と異なる。場所を表す助詞の「に」と「で」においてもしばしば異なるふるまいを示す。(34)の「に」はある場所に新しい状況が現出するのに対して, 「で」は既存の事物や事態の変化を示す。中国語は(35)にみるように, 英語や日本語よりはるかに敏感に反応する。(a) では主語が定か不定により動詞との語順が逆転し, (b, c) でも時間や場所を表す下線部の副詞語句と動詞の語順が逆転しているが, これは現実世界でのそれぞれの出来事の時間的順序に従っているためである。つまり (b) では彼は「两天之内」(2・3日たてば)「回来」(来る)のに対して, 中国に「住」んで「三年」になる。(c) ではすでに存在する「テーブルの上で」「とび」「とんだ」あとに「テーブルの上に」上がる。中国語の語順の違いは( )内の日本語訳の「で」と「に」に部分的に対応している。(非) 既存性は(35)からうかがえるように, 究極的には出来事の認知順序が言語の語順に反映されるもので写像一貫性の原則に由来する(写像一貫性の原則について詳しくは児玉 1998:93 参照)。

最後に動詞が行為の結果を含意するか否かにおいて言語間でどのような違いがあるかを比較する。

(36)a. John went to New York.

b. John got to New York.

c. John went to New York, but he didn't get there.

(37)a. He burned the paper. vs 彼が紙を燃やした。

b. The paper burned. vs 紙は燃えた。

c. \*He burned the paper, but it didn't burn. vs 紙を燃やしたが, 燃えなかった。

(38) John shot Mary. vs John shot at Mary.

太郎が花子を撃った。

(39)a. 我 殺了 他。

I kill ASP him

( I killed him. )

b. He died.

c. 我 殺了 他, 可是 他 没 死。

I kill ASP him but he not die

( I tried to kill him, but he didn't die. )

(36a) を発したとき (36b) が前提となり, ジョンはニューヨークに着いている。しかしその直後にその前提を取り消すことは (36c) のように可能である。これは英語・日本語・中国語に共通している。しかし(37)では事情が異なる。(37a) を発したとき英語や日本語では (37b) が前提となっている。しかし (37c) のようにその直後に前提を取り消すことは日本語では可能であるが, 英語では不可能である。一般に英語の動詞はその行為とともに行為の結果を含意し, 意味特性軸の行為の結果に敏感である。その結果, (38) のような動能構文 (conative construction) を発達させている。動能構文とは

shoot, scratch, peck, hit, cutなどの他動詞は行為の結果を含意するが、このような動詞が自動詞としてatを伴い、行為の結果を必ずしも含意しない構文である。したがって(38)の英語の動能構文では弾が命中したか否かは不明である。日本語は行為の結果に鈍感なためこのような違いが区別されない。(39a)を発したとき、中国語・英語・日本語とも(39b)を前提とする。しかしその前提は(39c)の中国語では取り消し可能であるが、英語や日本語では不可能である(詳しくは児玉2002:103参照)。その点、中国語は行為結果の意味特性軸に対して日本語以上に鈍感である。

意味特性軸が言語表現への動機づけとして強いかわい、どのような形式や他の意味特性軸と結合して現れるか、どのような統語上の制約によってその反映が阻止されるか、それぞれ言語によって異なる。意味特性軸を設定することにより、これまで無関係であるとみなされていた統語現象の間に新たな関連が見出され、言語における意味の重要性が明らかになるであろう。

## 6. 意味と形式の統合へ

連続体をなす現実世界を有限の非連続的な言語記号に表すとすれば、言語表現はカメラのように現実世界を写すのではなく、言語表現と現実世界の写像関係は人間の視点を介したものとなる。現実世界と言語表現の中間にあって両者を結びつける人間の視点をかつてSaussure(1916)は心的実体と呼び、心的実体をなす意味や形式をさらに価値や(実質でない)形相に基づいて分析しようとした。

今日、Chomskyの流れをくむJackendoffらが展開する概念意味論は言語能力と認知能力がそれぞれモジュールをなすとみなし、形式と意味と現実世界(特に空間構造)をつなぐものとしてそれぞれの中に概念を仮定している。この概念構造はCAUSE, GO, PATHなどの意味原素と呼ばれるものからなる。他方Lakoff, Langackerらの認知意味論は非モジュールの立場から言語と非言語の世界を区別せず、双方の認知主体として人間の概念化プロセスを基礎に言語表現を分析しようとしている。ここでは具体的なものの認知から抽象的なものへの認知が比喩的拡張によって行われると考えている。概念意味論も認知意味論も人間の空間認識を認知機構の基礎にしている点は共通しているが、前者がモジュール論、後者が非モジュール論をとる点では大きく異なる(同じモジュール論の立場でも例えばFodor, Chomsky, Jackendoffでその主張内容が異なることについてはZee-Nikanne 2000: 3-5参照)。

本論は統語論や認知能力がモジュールをなすか否かを問うものではない。形式と意味あるいは認知一般が自立しているか否かを問題にしていない。あえて問うならyes or noよりむしろmore or lessの立場をとり、形式・意味・認知にある程度の自立性を認め、それぞれが双方向的に影響し動機づけし合っているとみる。本論は意味と形式の中間に概念構造を設定したり、概念化プロセスとして特定の心的図式(イメージスキーマ)を仮定しているわけではない。多様な意味に共通している意味特性軸を中心に言語を分析してきた。意味と形式が一体になって言語を構成していると主張しながらも、分析のうえで意味と形式を分離して以後、明示的な形式に傾斜し、統語論中心となってきた。本論の主眼は分析法としては意味にそれ相応の役割をもたせるために形式の動機づけとなっている抽象的な意味を探り、意味と形式の統合をはかるべきというものである。この統合をはかることにより、文を超えた談話に意味上の構造が存在するか否かを見極めることが可能になる。今

日、明確な全体的枠組みが存在するわけではないが、枠組みをつくる前段階として今後さらに意味特性軸を発掘し、形式との関連を明らかにしていく必要がある。

21世紀に残された課題としてはあと1つ、分析対象をいかに拡大するかという問題がある。言語活動が多数の文を用いてまとめたテキストを形成する談話からなるとすれば、言語理論も当然談話またはテキストを対象とすべきであろう。談話構造の分析は§4の議論からうかがえるように意味論を中心にすえてはじめて可能である。概念意味論や認知意味論あるいは語用論は意味に関心を寄せてはいるが、残念ながら談話構造を扱う枠組みを用意しているわけではない。これに対して、Hallidayらの選択体系機能言語学は談話分析の参考文献としてしばしば利用される。この理由は言語活動の多様な機能を設定し、話し手・聞き手がなぜ特定の文構造を選び、他の可能性を排除するかを説明しようとしているためである。選択体系機能言語学は不十分ながらも談話を対象とする枠組みをつくらうとしている。

§5では意味特性軸が動機づけになって語から文に至る形態統語形式が影響をうける現象をみた。分析対象を談話に拡大した場合、その意味特性軸としては§5でみた対象依存性やなわ張りだけでなく、一貫性(coherence)などがその候補となる。このような意味特性軸はさらに対象を拡大して諸文化の考察にも容易に応用できる。意味特性軸は意味上の条件に応じて同一言語内または諸言語間に生じる言語構造の異同を対象としているが、言語に代えて文化とすれば、諸文化の異同を説明することになるためである。

Saussure(1916)やChomsky(1965)は、言語学の対象がラングや言語知識であり、パロールや言語運用ではないとした。この主張は統語論を中心に、文を最大の単位とする分析においてのみもってもらしくきこえる。しかし意味特性軸を中心に文を超える談話を分析した場合、ラングとパロールや言語知識と言語運用の区別は不要であり、むしろ両者を統合することになる。ここでは分析法と分析対象が密接につながっている。談話や文化も対象とする意味特性軸の分析は稿を改めて考察する。

## 引用文献

- Aitchison, J. 1978. *Linguistics* (Teaching yourself books). Hodder and Stoughton.
- Anderson, J.M. 1977. *On Case Grammar: Prolegomena to a Theory of Grammatical Relations*. Croom Helm.
- 安藤貞雄・澤田治美(編) 2001. 『英語学入門』開拓社.
- Bloomfield, L. 1933. *Language*. Allen & Unwin.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. Longman.
- Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. Mouton.
- . 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press.
- . 1981. *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- . 1995. *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Fillmore, C.T. 1971. 'Some problems for case grammar.' *Working Papers in Linguistics* 10:245-65. (田中春美・船越道雄訳 1975 『格文法の原理 言語の意味と構造』233-66三省堂)
- Goldberg, A.L. and F.Ackerman. 2001. 'The pragmatics of obligatory adjuncts.' *Language* 77:798-814.
- Grice, H.P. 1975. 'Logic and conversation.' In P.Cole and J.L.Morgan (eds) *Syntax and Semantics Vol3: Speech Act* 31-58. Academic Press.
- Jackendoff, R. 1987. 'The status of thematic roles in the linguistic theory.' *Linguistic Inquiry* 18:369-411.

- . 1990. *Semantic Structures*. MIT Press.
- Jespersen, O. 1924. *The Philosophy of Grammar*. Allen & Unwin.
- Keenan, E.L. and B.Comrie. 1977. 'Noun phrase accessibility and universal grammar.' *Linguistic Inquiry* 8.1:63-99.
- Kehler, A. 2002. *Coherence, Reference and the Theory of Grammar*. CSLI Publications.
- Kitamura, Y. 2003. 'On the double object construction and its passive voice.' [Unpublished Paper]
- 児玉徳美. 1987. 『依存文法の研究』 研究者出版.
- . 1991. 『言語のしくみ 意味と形の統合』 大修館書店.
- . 1998. 『言語理論と言語論 ことばに埋め込まれているもの』 ころしお出版.
- . 2002. 『意味論の対象と方法』 ころしお出版.
- McCawley, J.D. 1988. *The Syntactic Phenomena of English*. University of Chicago Press.
- 新田義弘ほか. (編) 1993. 『言語論的転回』(岩波講座 現代思想第4巻) 岩波書店.
- Quirk, R., S.Greenbaum, G.Leech, and J.Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Payot.
- Talmy, L. 1985. 'Lexicalization pattern: semantic structure in lexical forms.' In T.Schopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description*, Vol 3:57-149. Cambridge University Press.
- Zee, E. van der, and U.Nikanne (eds.) 2000. *Cognitive Interfaces: Constraints on Linking Cognitive Information*. OUP.

( 本学特任教授 )